

高校教員に聞く！「高校の教育や入試改革と、大学への期待」

一足先に15歳人口減に直面する高校では、どのような改革が進んでいるのか。革新的な教育に取り組み、成果を上げつつある高校へ取材した。今後の高大連携や大学改革の参考にされたい。

高校名と話を聞いた方	栃木県立佐野東高校 主幹教諭 早川淳子 ^{*2}	昭和学院中学・高校 ジェネラルアカデミーコース・探究科主任教諭 竹澤陽介	佼成学園女子中学・高校 教頭・進路指導部長・学園統括進路指導部長 西村準吉	京都市立開建高校 教頭 宮越敬記	熊本市立必由館高校 副校長 佐藤宏一
学校概要	栃木県佐野市／共学／普通科／1学年200名	千葉県市川市／共学／普通科(ジェネラルアカデミーコース<GA>・インターナショナルアカデミーコース<IA>・トップグレードアカデミーコース<TA>・サイエンスアカデミーコース<SA>・アドバンスアカデミーコース<AA>)／1学年356名(中学校180名・高校176名募集)	東京都世田谷区／中高一貫・女子校／普通科(留学コース・スーパーグローバルコース・特進コース・進学コース)／1学年180名(中学100名・高校80名募集)	京都府京都市／共学／ルミノベーション科(その他普通教育を施す学科)／1学年240名／DXハイスクール指定校 ※京都市立塔南高等学校を再編して2023年度に開校。ルミノベーションとは、「光」を表すLuminと「革新」を意味するInnovationを組み合わせた造語。「地域社会で学ぶ」学科	熊本県熊本市／共学／文理総合探究科(文理コース、芸術コース[音楽系・美術系・書道系]、生活デザインコース)／1学年305名／文部科学省普通科改革支援事業、DXハイスクール指定校
主な進学先・利用入試	北海道教育大学釧路校、岩手大学、山形大学、茨城大学、宇都宮大学、群馬大学、横浜国立大学、琉球大学、秋田県立大学、前橋工科大学、群馬県立女子大学、埼玉県立大学、桜美林大学、北里大学、杏林大学、駒澤大学、昭和女子大学、中央大学、帝京大学、東海大学、東京工科大学、東京農業大学など／利用入試は一般4割：年内6割	筑波大学、千葉大学、茨城大学、東京理科大学、明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学、日本大学、獨協大学、國學院大學、東洋大学、専修大学、駒澤大学、明治学院大学、東邦大学、順天堂大学、昭和女子大学、東京農業大学、武蔵大学など／利用入試は一般3.5割：年内6.5割	東京外国語大学、東京都立大学、慶應義塾大学、上智大学、学習院大学、明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学、芝浦工業大学、京都市大学、成蹊大学、成城大学、東京女子大学、日本女子大学、津田塾大学など／利用入試は一般2割：年内8割	2023年度開校につき、進学者実績なし	熊本大学、広島大学、山口大学、福岡教育大学、佐賀大学、大分大学、宮崎大学、鹿児島大学、熊本県立大学、山口県立大学、北九州市立大学、長崎県立大学、久留米大学、西南学院大学、福岡大学、立命館アジア太平洋大学、亜細亜大学、多摩美術大学、東京女子大学、京都産業大学、同志社大学、立命館大学、関西外国語大学など／利用入試は一般7割：年内3割
教育の特徴とその成果	探究型キャリア教育で生徒が前のめりの進路研究 ▶生徒が進学先をリストの中から選ぶのではなく、前のめりで進路を考えられるようキャリア教育を見直し、3年間にわたって進路に向き合う探究型「キャリアプロジェクト啓」(Keiプロジェクト)を設計。大学や地元企業との連携により、生徒は自分で設定した課題を深める。1年次は探究とはどういうものかを体験するために、地域と協働しながらチームで興味のあるテーマを深め、社会や学問への視野を広げる。2年次はゼミ形式。グループごとの問いについて研究し、全員がボスター発表。さらに選抜された生徒は発表会で、高大連携協定を締結した大学等が参加する中、社会課題の解決や日常生活の変化につながる提案を行う。 ▶2024年度のアンケートでは、「Keiプロジェクトを通じて自ら学び、行動することができるようになった」「自分自身の将来について考える機会が増えた」と答えた生徒が1、2年生共に90%以上で、生徒の自己肯定感を高め、キャリア観の形成を促すことができている。 ▶中には、「Keiプロジェクトで指導を受けた先生に、もう一度話を聞きたい」と教員に相談する生徒もあり、「一歩前に踏み出す力」の育成につながっていると教員は評価。	偏差値重視から、やりたい、伸ばしたいこと重視へ ▶今の子どもは小学校から多様な学びを経験したり、興味・関心に応じたSNSコンテンツに触れ続けたりした結果、好きな事重視の志向が強く、保護者も、わが子の個性に応じて楽しみながら成長できる環境を求める傾向がある。加えて、私立校の大手私大付属校化が進む中、進学実績だけでは付属校にはかなわず、生徒募集が厳しくなることから、生徒の個性重視教育に転換。 ▶例えばSAコースでは、理科を楽しむことをコンセプトに、音響工学など専門的な講座を6つ用意。選んだ講座の中でテーマを自由に設定し、実験や研究を行う。IAコースでは、ネイティブスピーカーと日本人教員が担任となり、ホームルームを含めてオールイングリッシュで活動。 ▶部活動重視の生徒向けGAコースでは、部活だけでなく、探究活動を通じて、自分の興味関心を将来の生き方につなげる教育を行う。12の分野に分かれた「マイゼミ」に所属し、一人一テーマで探究活動。文系なのに麺菌に興味を持ち、家で培養した菌と廃棄農作物でジャムをつくり販売する生徒や、祖母から聞いた子安講の話から、地域の神道と観光をテーマに探究し、國學院大學まで話を聞きに行く生徒も。 ▶各コースの自分の興味や得意に合わせた学びで生徒は自信が付き、能力も向上し、保護者からも好評。	高大連携によって主体的な学習方法へと転換 ▶教育改革、大学入試改革の動きを見据え、2020年度にカリキュラムを改定した。近視眼的な学習に警鐘を鳴らし、骨太の学力を身に付けるべく中間テストを廃止。一般選抜とのバランスを取り期末試験は残した。併せて「新評価システム」として成績評価の観点と配分を変更。従来型学力6割、新しい学力(プレゼンテーション、グループワーク等)4割にした。 ▶高2からは、探究をゼミナール化した少人数の「課題研究ゼミ」と、大学の学びに触れる「キャリアデザイン」がスタート。後者は2時間連続のコマで、協定を締結している大学の授業の受講や個人研究を進めるなど、座学中心の学習からアウトプット中心の学習へと転換。 ▶課題研究ゼミやキャリアデザインに打ち込む時間をつくるために、週に一度「スロークタイム」と呼ぶ余白の時間を25分間設定。予習やPBLの準備の時間として活用できる。 ▶以前は理系志望者が全体の15%程度で、その大半が看護学部の志望者だったが、多様な大学の学びに触れる教育に転換した結果、工学部や獣医学部など、理系学部への進学者が増加した。	「やってみたいことをやってみる」、生徒が学び方を選ぶ ▶私立校が多い京都では、高校無償化政策の影響もあり、近年公立校が不人気。特色ある公立校が求められる中、従来型の、画一的で教員が「一方的に知識を伝達する」授業から脱却すべく「生徒が主体の学び」を追求する新しい高校として、校舎も新築して開校。校則も文理選択もない。 ▶「普通の授業が楽しい」高校をめざす。学び方は、生徒が自分に合った方法を選ぶ。教科書に沿った授業、ワークショプ型、個人学習中心型など、教科ごとに選択可能。そのため、教室は目的や手法に応じて変幻自在に変えられる可動式。教員は原則3人のチーム制で、ベテラン、新任、他校経験者が毎回打ち合わせをし、得意を活かして指導する。 ▶探究活動は、地域をフィールドに「やってみたいことをやってみる」。やりたいことを他者と協働して取り組むことで、社会の役に立ちたい人間に育つから。近隣大学の学生や住民にも協力してもらっている。中には、校庭の隅で畑を始める生徒もいる。 ▶授業で得る生徒が激減し、協働力・対話力も向上。探究活動の成果を発揮できる総合型入試の志望者が激増するなど、進路選びにも好影響。	学科再編で文理横断・探究的な学びを実現 ▶2024年度に普通科を文理総合探究科に改編。少人数学級(35人程度)で、文理を総合的に学ぶカリキュラムを編成。 ▶学校設定教科 ^{※1} 「必由学」を設置。数学、地歴・公民、情報、音楽、英語の教員が連携して考案した教科等横断的な学習によって、プレゼンテーション、データサイエンス、多文化理解の知識・技能を身に付ける。 ▶総合的な探究の時間では、熊本市役所全面協力のもと、地域の課題解決に向き合う。5月に市役所の課など、29のブースを設置。生徒は5か所を回って説明を聞き、探究のテーマを設定。3月に代表生徒約50名が発表。市役所や企業からの専門的な質問・助言により、生徒たちは学びを深めることができる。 ▶3年生対象のアンケートでは、75%の生徒が「探究学習の経験や成果が進路に影響を与えた」、45%の生徒が「探究学習の経験から希望進路を変更した」と回答。探究学習が進路に影響を与えていることがわかる。 ▶地域の「デジタルものづくり」の拠点として、年間を通して中高大連携でデジタル人材・理系人材の育成をめざす。
生徒募集状況と入試や募集活動の取り組み	「Keiプロジェクト」を特色的な教育としてアピール ▶定員の2割を小論文と面接で判定する特色選抜で募集。 ▶募集は堅調。2025年度入試では特色選抜、一般選抜ともに、栃木県公立高校の平均倍率を上回る結果に。 ▶「Keiプロジェクト」を特色的な教育として積極的にアピール。学校説明会では、教員は前に出ず在校生が発表。高校のホームページに特設ページを作成し、日々の活動内容や生徒の満足度を「Keiだより」として発信、一般への認知を図っている。 ▶2024年度の学校説明会には1,000人の来場者が集まるほどの人気。入試の面接では、Keiプロジェクトに取り組むために志望したと話す受験生もいる。	ミスマッチを防ぐ個別相談会が好評 ▶改革後、生徒募集は好転し、倍率も上がった。コースのミスマッチを防ぐために、個別説明会を豊富に開催。合同・個別の学校説明会やオープンキャンパス、進学相談会など、毎月2回ほどのペースで実施している。受験生のはとんどは、個別相談会を経て受験している。 ▶入試は、中学では2科目入試、1科目入試、自己表現およびプレゼンテーション中心の入試など、多様な入試を展開。高校入試は千葉は公立志向のため公立の入試方式に沿い、英語・数学・国語の筆記試験を基本とし、コースによっては英語面接や理科・社会の筆記試験も追加する。	在校生・卒業生が高校をPR ▶中学、高校ともに募集は堅調。高校は全てのコースで定員充足。スーパーグローバルコースの人气が年々高まっている。 ▶募集活動では、生徒を通して教育成果を見てもらうため、、在校生を前面に出している。在校生による広報ボランティアには約150人が登録。校内見学時の引率役やプレゼンテーション役を担う。2006年から導入している校内予備校のサポーター役として学習へのアドバイスをしている卒業生チューターも募集活動に協力している。	特色ある教育で、公立の中ではトップレベルの高倍率 ▶京都府の公立高校入試は、前期、中期、後期入試を実施。本校では、学力検査に加え独自入試を実施する。 ▶前期は国語・英語・数学の学力検査(京都府の共通検査)、報告書に加え、グループワークを実施し、答えが一つではない問いに向き合う姿勢・態度や、他者と協働する姿勢・態度を評価する(出題例「絶妙な信号機」「みんなが感動する傘」)。 ▶2025年度入試前期の志願倍率は3.01倍(京都府の普通科平均は2.49倍)。普通科がメインとなる中期も1.72倍と、京都府の普通科平均0.98倍を大きく上回り、開校以来受験者数が増えている。	デジタル部門を新設し広報を強化 ▶新たな校務分掌としてデジタル推進部を設置。広報企画部と協働し、学校ホームページやSNSの更新、熊本市広報誌上でのPR、中学校訪問や小中学生を対象としたデジタルものづくり体験など、広報・企画活動の推進に注力している。 ▶前期(特色)選抜、後期(一般)選抜の募集人員は半々。改革初年度にあたる2024年度選抜では、前期選抜3.46倍(平均1.59倍)、後期選抜2.24倍(平均0.94倍)と、熊本県の公立高校内でトップクラスの倍率。改革を知り、面白い学びができる高校として注目されるようになった。
進路指導方針と生徒に勧めたい大学や学部	高校での探究活動を評価する入試を望む ▶大学教員の専門分野や3つのポリシーまでよく見て進学先を検討するよう指導している。 ▶総合型選抜の受験を志向する生徒が増えている。部活動や学力だけでなく、探究の成果を発表できる入試があると生徒を送り出しやすい。 ▶生徒と学部のマッチングを考えるうえでは、社会課題と結びついている学部だと、高校での学習がしかしやすい。文理融合型の学部では、探究学習で関心を持ったテーマに、さまざまな学問系統からアプローチできる場合が多い。例えば、設置構想中の立教大学環境学部や、桜美林大学リベラルアーツ学群には注目している。	生徒をワクワクさせてくれる大学を勧めたい ▶ずっとSNSで好きな事、モノを選択し続け、それ以外は「存在しない」世帯なので、大学は、「選ばれる」努力を。新学部をつくってもHPでその分野の研究の楽しさを教授が語るだけでは、生徒にはひっかからない。面白そうと興味を引く「つなぐ」コミュニケーションが重要。 ▶入試については、一発勝負の学力検査よりも、経験や検定重視の入試のほうが、生徒の地道な努力を評価してくれるため、高校も生徒に説明しやすい、生徒も早い段階から取り組みやすい。なぜそのような入試をするのか、大学のメッセージも大切。その意味で、立教大学の英語外部試験利用入試や、受験科目に数学を設けた東洋大学経済学部の入試などは、評価している。	幅広い選択肢から大学を選ぶよう指導 ▶偏差値上位から中堅の大学の人気学部で競争が激化しているため、志す学部が明確なら、大学の偏差値にとらわれずに大学選びを行うよう指導している。 ▶昭和女子大学のように共通教育が充実している大学や、同様に学群制で幅広い学びを提供する桜美林大学、低学年次からゼミナールを充実させている成城大学などは、高大の接続がスムーズな大学として認識している。国際基督教大学も初年次の英語教育に工夫がなされている。また、立教大学経営学部のビジネスリーダーシッププログラムは、学生が学びのインシアチブを取っている点でも注目している。	学生が生徒の活動に関わってくれる大学 ▶進路指導は生徒の「やってみたい」を実現するためのサポートと捉えている。生徒が何をしたいかが大前提で、「学力があるから〇〇大学へ」「国公立大学へ」といった指導はしない。 ▶京都産業大学アントレプレナーシップ学環には、やっど「学問」から「実践する教育」をする大学が出ると注目している。龍谷大学とは、職員の方に運営指導委員を受けていただいたり、学生がTAとして生徒の活動を支援してくれたり、今年度からは共同で探究学習を実施したりしている。京都文教大学とは、DX等に関する学びを協働で行ったりしている。新しい教育に挑んでいるため、支援してくれたり、自身も新しいことに挑戦したりする大学にシンパシーを感じる。高校見学は大歓迎なので、ぜひ訪問を。	高校の教育目標と合う大学と連携したい ▶1年次は「必由学」や総合的な探究の時間で自身の興味・関心や能力を発見する。2年次からは具体的な進路検討に役立って、大学の出張講義を開催したり、オープンキャンパスへの参加を促したりしている。 ▶例年70～80人であった国公立大学一般選抜出願延べ数が130人に増えた。学びたいことを明確に掲げ、最後まで諦めずに前向きに行動する生徒が増えている。 ▶探究的な学びをすすす大学を知りたい。それが、将来の目標を決めて探究を進める生徒にとって個別最適な学びとなる。また、理系人材の育成のため、DXに力を入れている大学と連携していきたい。
大学への期待や要望	教育を一緒に作るパートナーに ▶教育を一緒につくり上げていく姿勢を持っていただけると、長期的な関係を築ける。「Keiプロジェクト」の連携先は、個別のオーダーにも対応が可能な大学。また、生徒が学問に触れられる機会も増やしてほしい。 ▶生徒とのコミュニケーションにおいて、全体に向けた発信だと高校生に響きづらい。個々への発信が望ましいが、一人ひとりへの対応は難しいので、例えば「佐野東高校の皆さんに向けて」といった方法であれば、高校生は探究を持つだろう。 ▶個別相談会は定員が埋まりやすいので、豊富にあるといい。	継続的、長期的な関わりとコーディネーターが鍵 ▶高校だけでは、生徒全員の探究活動に個別に伴走するのは困難なため、桜美林大学に協力を依頼し、コーディネーターの方が学生や教授とつないで生徒の相談や活動の評価をサポートしている。長期的、継続的な関わりにより、生徒の大学への理解が深まり、同大への進学者が増加した。特に教員養成系の大学は、探究学習支援の実習で同様の取り組みを検討しては。単発の出前授業だけでは、大学へ関心は向きにくい。 ▶理系の探究については、高校だけでは限界がある。施設・設備面での協力はもちろん、専門分野に関する教員のアドバイスももらいたい。	教養教育の充実が高大接続につながる ▶大学には教養教育の充実を期待する。高校・大学をつなぐ教育としても重要。また、大学入学直後の学生やゼミに所属する前の学生にとって、大学の学問のハードルは高い。初歩的な語学やアカデミックライティング、データサイエンスをはじめ、専門的学びへと橋渡しする教養教育や学びのスキルを上げる授業が充実していると、高校としては生徒を安心して送り出しやすい。一部の教員に任せるのではなく、大学全体の取り組みとして進めてほしい。	生徒が持つ多様な力を評価する入試改革に期待 ▶入試改革。ペーパーテストのみで評価するのではなく、高校時代にどのような活動をしてきたのかを評価し、生徒の多様な力や異分子を認めほしい。例えば、大学でやりたいことをアピールする動画を大学が見て、スカウトするような入試があってもいいのでは。ミスマッチを防ぐこともつながる。 ▶大学の職員さんが大学全体を把握しているのに、高校が職員とつながる機会は限られている。FD・SDフォーラムで講演した際は、たくさんの職員と知り合えて、大学の未知の部分を知ることができた。もっと職員さんにも高校の改革の実態を見てほしい。	魅力的な取り組みについて積極的なアピールを ▶生徒も保護者も自分の知っている大学から進路を考えようとする傾向が強いので、大学からのアピールが必要。例えば、本校のOB・OGにあたる学生を派遣してくれるプログラムがあったら、生徒は関心を持つだろう。 ▶生徒は情報を取りに行くのが難しいので、出張講義等で魅力的な取り組みを聞かせてほしい。かつて出張講義で希望するテーマと専門分野が異なる教員が派遣されたことがあったが、要望に対してきめ細かな対応をしてくれると連携しやすい。

^{*2} 現・栃木県立足利中央特別支援学校教頭

^{*1} 地域、学校及び生徒の実態、学科の特色等に応じて学校が設けられる教科

取材・文／鈴木康介